

〔論説〕

現代性の古典学（2）

——庄司薫『バクの飼主めざして』——

與那覇 潤

一、歴史と情報

ついX年前までは（このXに入れる数字は、人によってそれぞれがう）、若者はその努力によってこの歴史の全体を理解し、彼女を愛し、この歴史という素晴らしい恋人のために献身し、使命感と一体感を持って生きる夢を持てたのだ。それなのに今は、「歴史」はかつての素朴で清楚な乙女ではなく、膨大な情報量で厚化粧したとらえどころのない怪物になってしまった……⁽¹⁾。（点線原文）

歴史が恋人！ そう見ることは多くない表現である。まして著者は、その主語を同時代の「若者」全般に置いている。歴史が趣味の人には、嗜好の対象が「恋人のようなものです」といった、ありきたりの喩えをしているのではない。

しかし、ここでいう歴史を自分の人生に「意味を与えてくれるもの」と読み替えれば、含意を汲むのは難しく

ない。いま、社会の趨勢はいかなる進路に向かっているか。そこでどう振るまうことが、過去の反省を踏まえた者として正しいか。

歴史の姿がはつきりしていれば、こうした問いに明瞭に答えられる。それが本人の生き方に自信と、社会的な承認をもたらす。恋する相手に好ましく映ろうと努め、受け容れられることで思春期の自我が安定するさまと、たしかに似ていなくもない。

だがそうした意味での「歴史」は機能しなくなりつつあると、著者は言う。手前での説明にいわく、「価値の相対化と情報洪水が同時進行するという状況の中では……ぼくたち一人^{ママ}びとりの個人的な情報処理のむずかしさときたら論外という感じになるわけだが、このことが、結果として歴史への正^{ママ}当な接^{ママ}続^{ママ}感^{ママ}とでもいうものを奪ってしまうらしいのだ」(二二八頁。傍点引用者)。

流通する情報が増えたぶん、微細をうがった過去のディテールが豊かになっても、なにが歴史の本筋かが見えなくなる。だから価値観も相対化され、同じものを眺めても周囲と評価が合わない。量的な厚化粧が膨れるばかりで、質的に正体をつかめないデータの層山へと「歴史」は化けてしまい、誰もが途方に暮れている――。

さてこんな文章が書かれたのは、いまから何年前のことだろう。

引用の著者は、庄司薫。一九七三年のエッセイ集『バクの飼主めざして』に収めた時評「'70年代の青春」の一節で、初出は七一年四〜五月の『読売新聞』である。